

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

＊射場天体観測所一覧を収蔵—その1—

2013年1月6日、京都大学名誉教授竹本修三氏より「LAYMANの科学：明月記の客星出現の記録を海外に紹介した日本人」—射場保昭—という研究会が京都の冷泉家で1月10日にあるとの連絡をいただいた。明月記の客星出現の記録を英文で紹介した射場保昭氏の研究会ということで冷泉家での研究会であった。参加者はそうそうたるメンバーで、冷泉家当主の冷泉為人氏、貴実子令夫人、佐藤文隆京都大学名誉教授、小山勝二京都大学名誉教授、竹本修三京都大学名誉教授、大野照文京都大学総合博物館長、文部科学省文化審議会専門委員藤本孝一氏、朝日新聞記者天野幸弘氏、射場保昭氏ご次男射場満家氏や冷泉家時雨亭文庫事務局の皆さんなどであった。この研究会の趣旨は、明月記の客星出現記事を海外に英文で紹介した射場保昭氏の展示会を京都大学総合博物館で開催する準備会という位置づけであった。

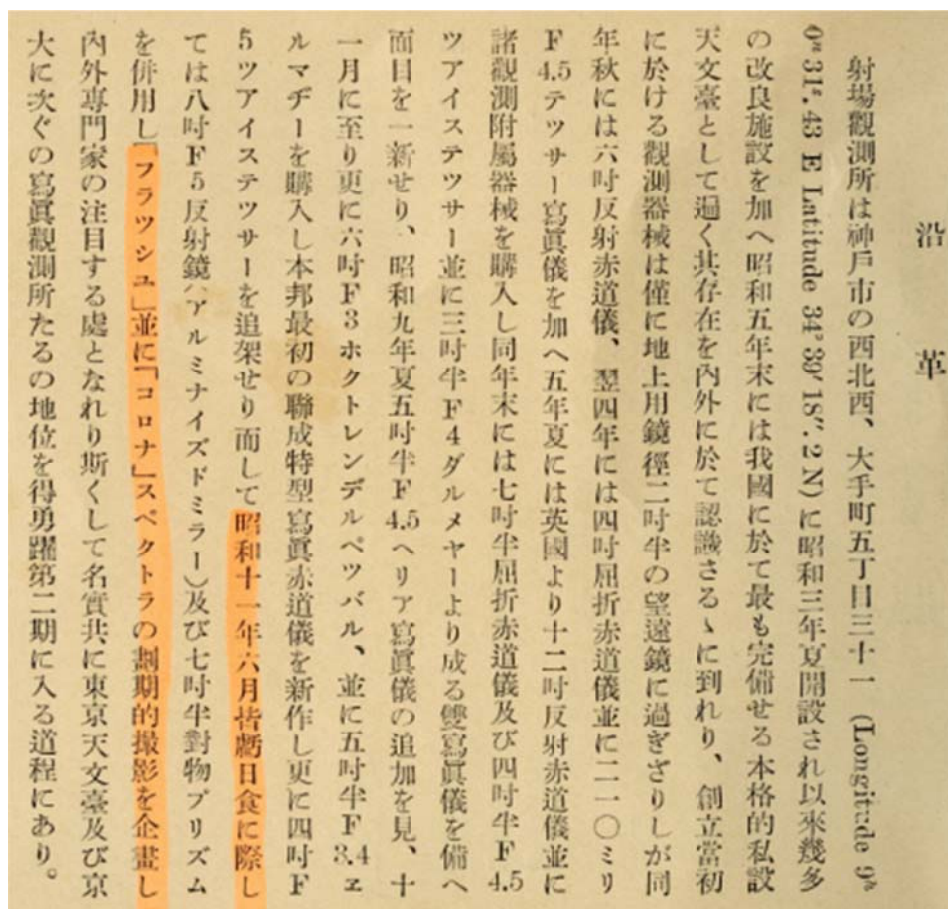


写真1

筆者が招待されたのは、射場保昭氏が展開していた射場天体観測所の器材一切が1946年

に当時の東京大学東京天文台に寄贈されたとの歴史的事実があり、現在、国立天文台でアーカイブの仕事をしている筆者、一緒にアーカイブの仕事をはじめた渡部潤一氏にお呼びがかかったということであった。神戸に射場観測所が設立されたのは1928年(昭和3年)であった。この研究会の席で射場満家氏から「射場天体観測所一覧」をいただいた。射場観測所の沿革の部分が写真1である。

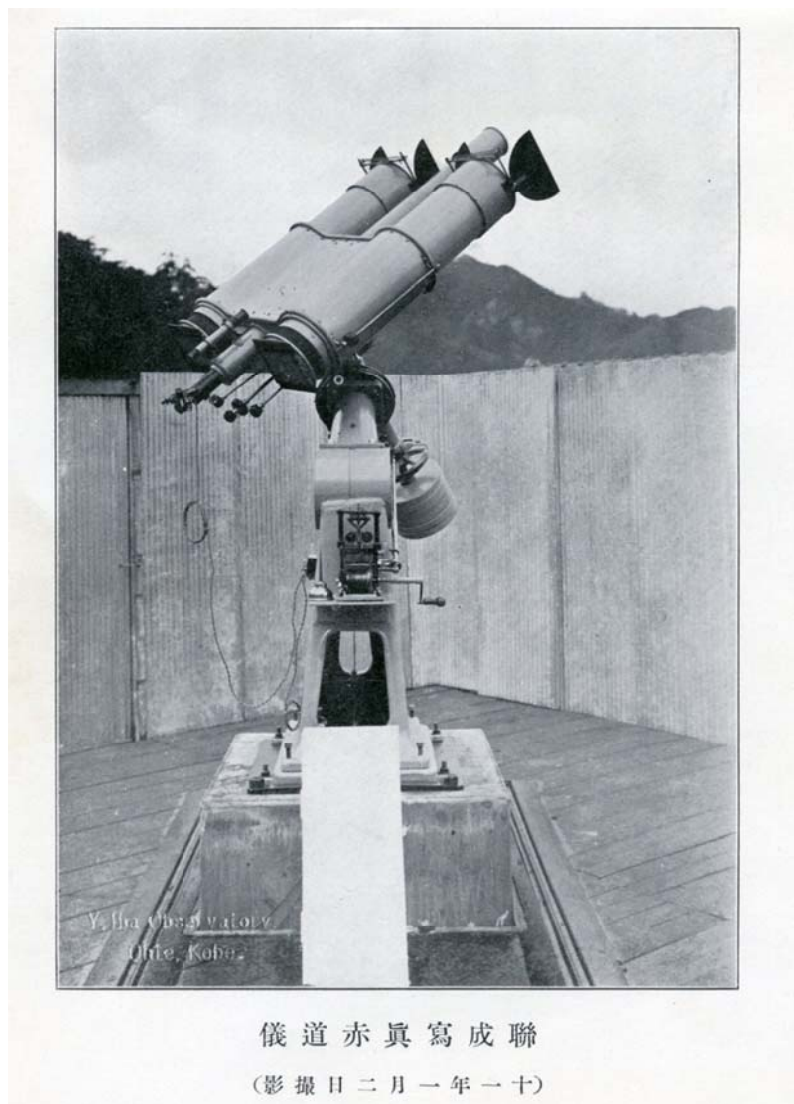


写真2

渡部は都合がつかず、国立天文台からは筆者が1人出席した。研究会では時間の都合で最初に京都大学総合博物館長大野氏から「射場保昭展」の趣旨説明があり大野氏は所用のため途中で退席された。続いて竹本修三氏から射場保昭氏の詳細な紹介があり、射場保昭氏の次男満家氏から補足説明があった。筆者からは、現在判明していることは、1946年に寄贈された器材他の痕跡はまったく把握できていないが、元東京天文台職員であった富田弘一郎氏の天文ガイド「インタラクティブ」Vol.9(春)1997の69ページに下記の記述があることを紹介した。

「この赤道儀（西村製作所製のブローケンヘッド型ドイツ式赤道儀）の姉妹機が神戸の射場観測所で、口径 13cm のホクレンデルとエルマジーの人像玉を載せた双写真儀として 1934 年に完成、後に 10cmF5 のエアロテッサーを同架して、3 重天体写真儀となりました。本機は 1946 年、東京天文台に他の射場の設備一切とともに移管され、1945 年 2 月の本館の火災で多くの実験器具を失った天文台の復興に多いに貢献したものです。この架台は試作カメラを載せて流星写真儀として活用されました」

この記事にある 3 重天体写真儀が「射場天体観測所一覧」の 3 枚目の写真と思われる（写真 2）。富田氏の記事には、この赤道儀は流星写真儀に転用されたとある。現在筆者の手元にある東京天文台の流星写真儀の写真と比較して見た（写真 3）。



写真 3

この 2 枚の写真の赤道儀は、撮影した方向が異なるのではっきりとは分らないが、極軸がコラムの上部に載せられた形でなく、腕になっている点、コラムの南側に時計仕掛けの機構（ガバナー）がある（通常この形になるが）様子が射場観測所にあった 3 重天体写真儀の西村製作所製のブローケンヘッド型ドイツ式赤道儀と思われる。現在、国立天文台

には流星写真儀は 1 台しか残っていない。その流星写真儀は架台がなく回転セクターの付いた 4 連カメラ部分だけである (写真 4)。



写真 4 流星写真儀

現在のところ、射場天体観測所関係のもので国立天文台で発見できた資料はこの流星写真儀の架台に転用された赤道儀 1 台である。その他寄贈されたコルトバ天図を香西洋樹氏が有効に利用させてもらったという情報もある。

また次号に引き続き射場観測所関係のことについて書きたい。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp